



Luncheon Linguistics

2026年4月29日 (水)

初期調査報告： トダ族・コタ族の言語と文化

小林 颯

(東京外国語大学大学院 博士後期課程)

本研究は、本学TReNDセンター・サステイナビリティ研究部門の支援を受けたものである

本発表の構成

1. 調査の概要

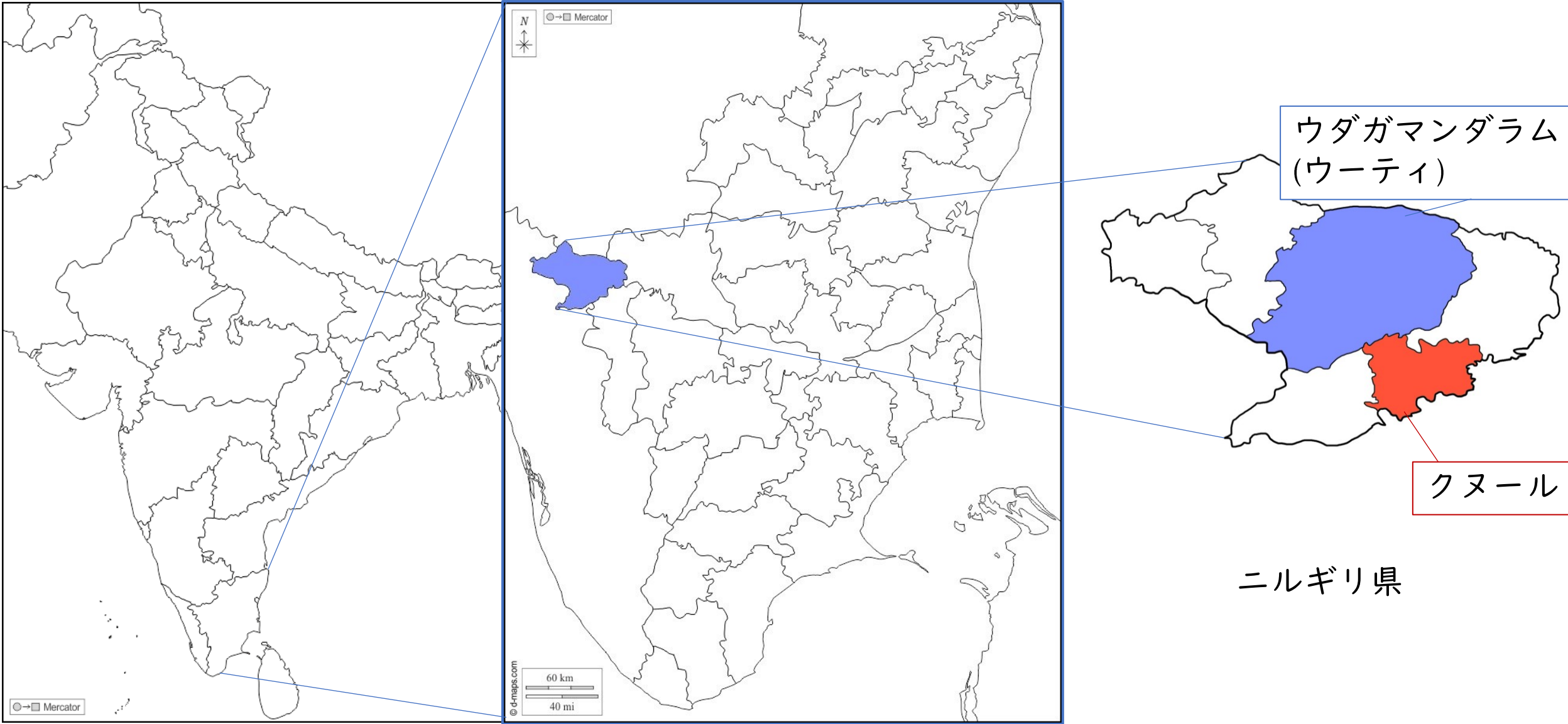
2. トダ^ダ族とトダ^ダ語

3. コタ族とコタ語

4. 比較：トダ^ダ語・コタ語・タミル語

1. 調査の概要

- ◆ 調査地： ウダガマンダラムとクヌール
@タミル・ナードゥ州，インド
- ◆ 調査期間：2026年2月～3月
- ◆ 調査対象：トダ語 (とコタ語)



インド

タミル・ナードゥ州

ウダガマンダラム
(ウーティ)

クヌール

ニルギリ県

図1: ウダガマンダラムの位置

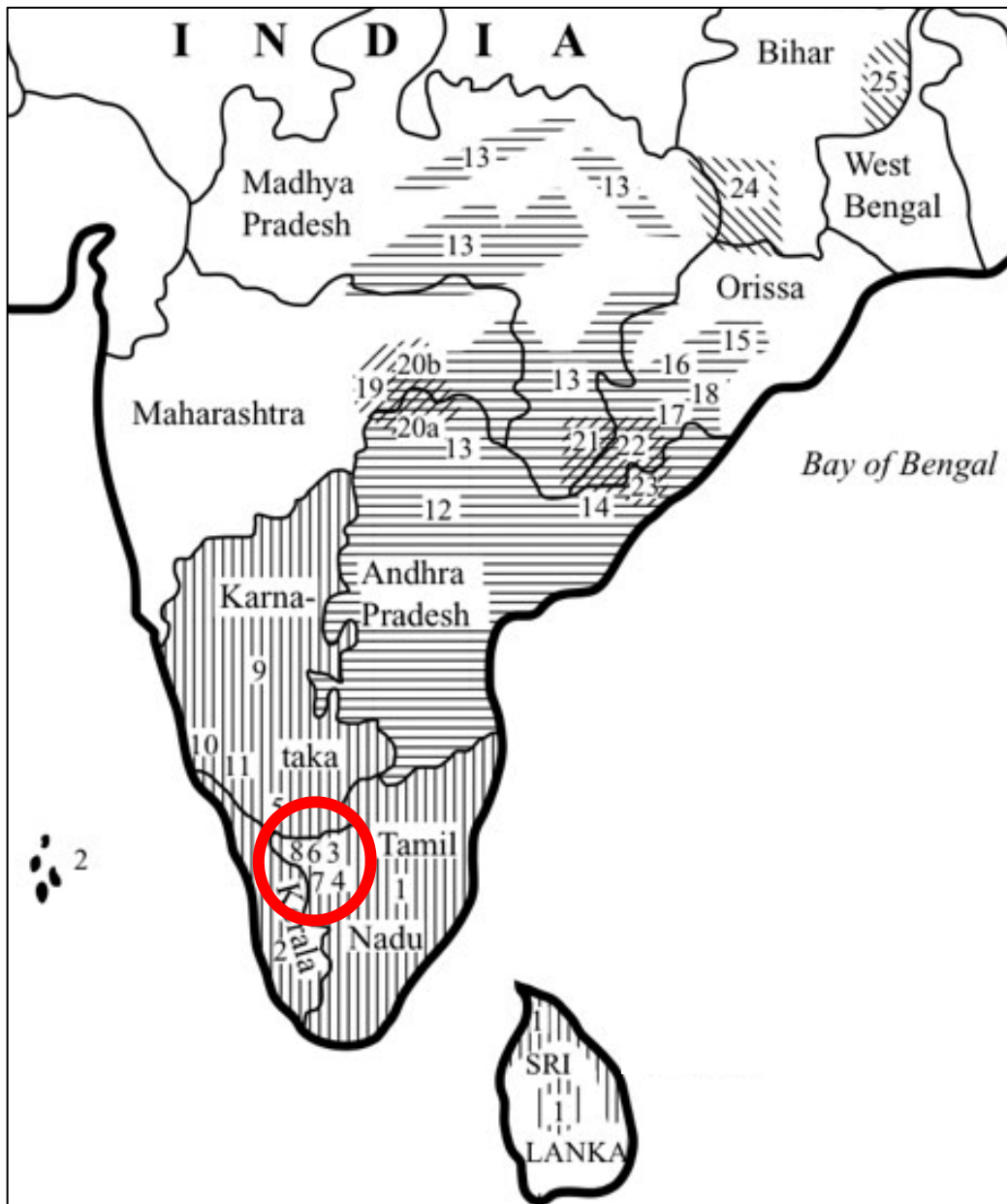
(<https://www.d-maps.com/>の白地図をもとに発表者作成)



(2024年9月撮影)



(2024年9月撮影)

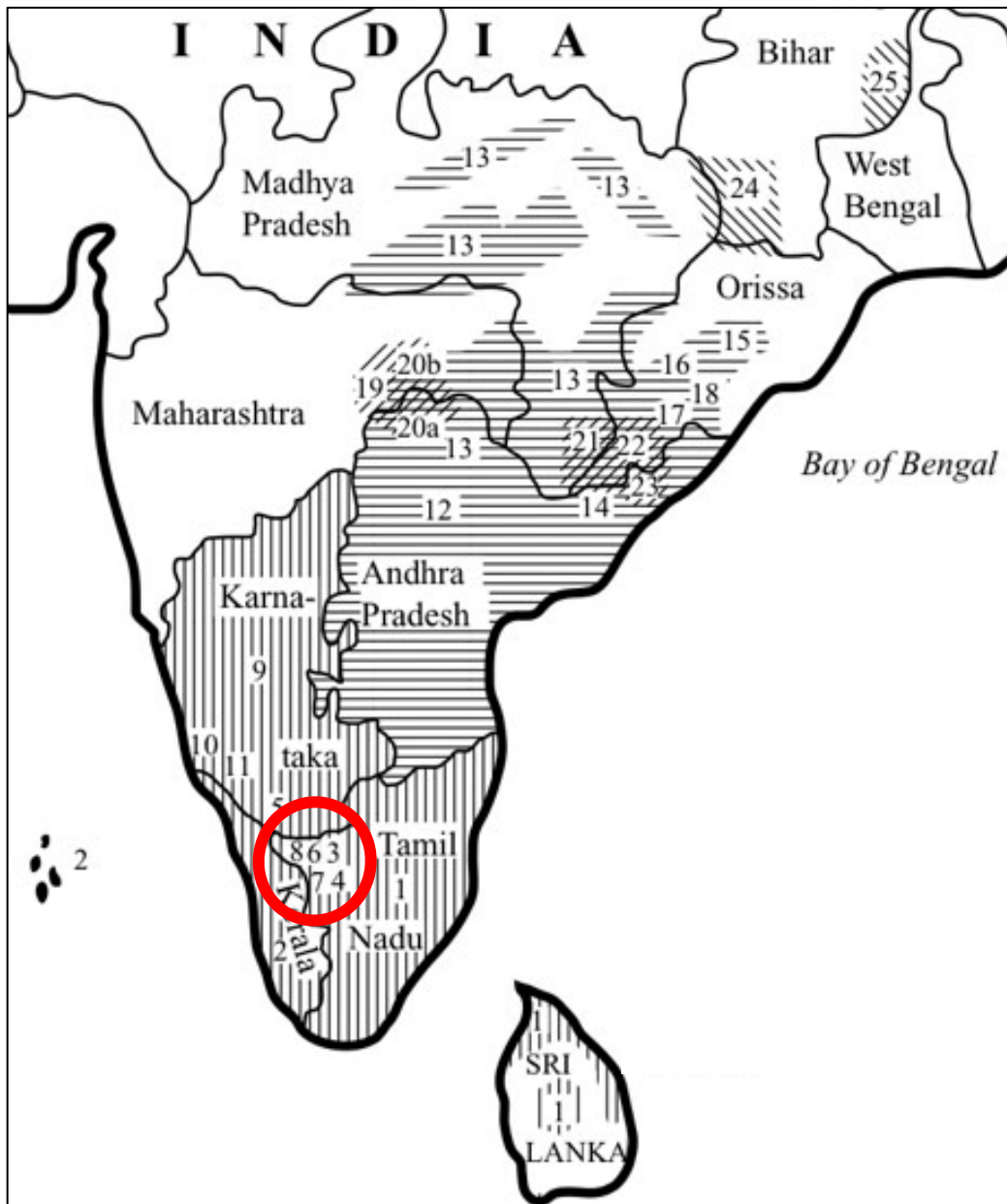


- ◆ ニルギリにはタミル語のほかに5言語が密集
 - いずれも南部ドラヴィダ語派
 (地図上の数字と対応)

1. タミル語
3. イルラ語
4. クルンバ語
6. トダ語
7. コタ語
8. バダガ語

図2: 南アジアにおけるドラヴィダ諸語の地理的分布

(Krishnamurti 2003: 18, 一部改変)



- ◆ ニルギリにはタミル語のほかに5言語が密集
 - いずれも南部ドラヴィダ語派
 (地図上の数字と対応)

1. タミル語
3. イルラ語
4. クルンバ語
6. **トダ語**
7. **コタ語**
8. バダガ語

図2: 南アジアにおけるドラヴィダ諸語の地理的分布

(Krishnamurti 2003: 18, 一部改変)

- ◆ 伝統的に、トダ族は山頂部に広がる丘陵で水牛の放牧を、バダガ族は農耕を行い、コタ、イルラ、クルンバの諸族は籐製品を造ったり、蜂蜜を採取したり、狩猟を行ったりして、彼らの間でそれらの生産物を交換してきた
→ 19世紀頃の植民地支配により崩壊
- ◆ 独立後は政府の同化保護政策により、伝統的な住居には住まず、子どもたちは学校でタミル語を習う

(辛島 2012: 580–581, 一部改変・文字飾りは発表者による)

◆ ニルギリにおける諸部族の分布 (バダガ族を除く)

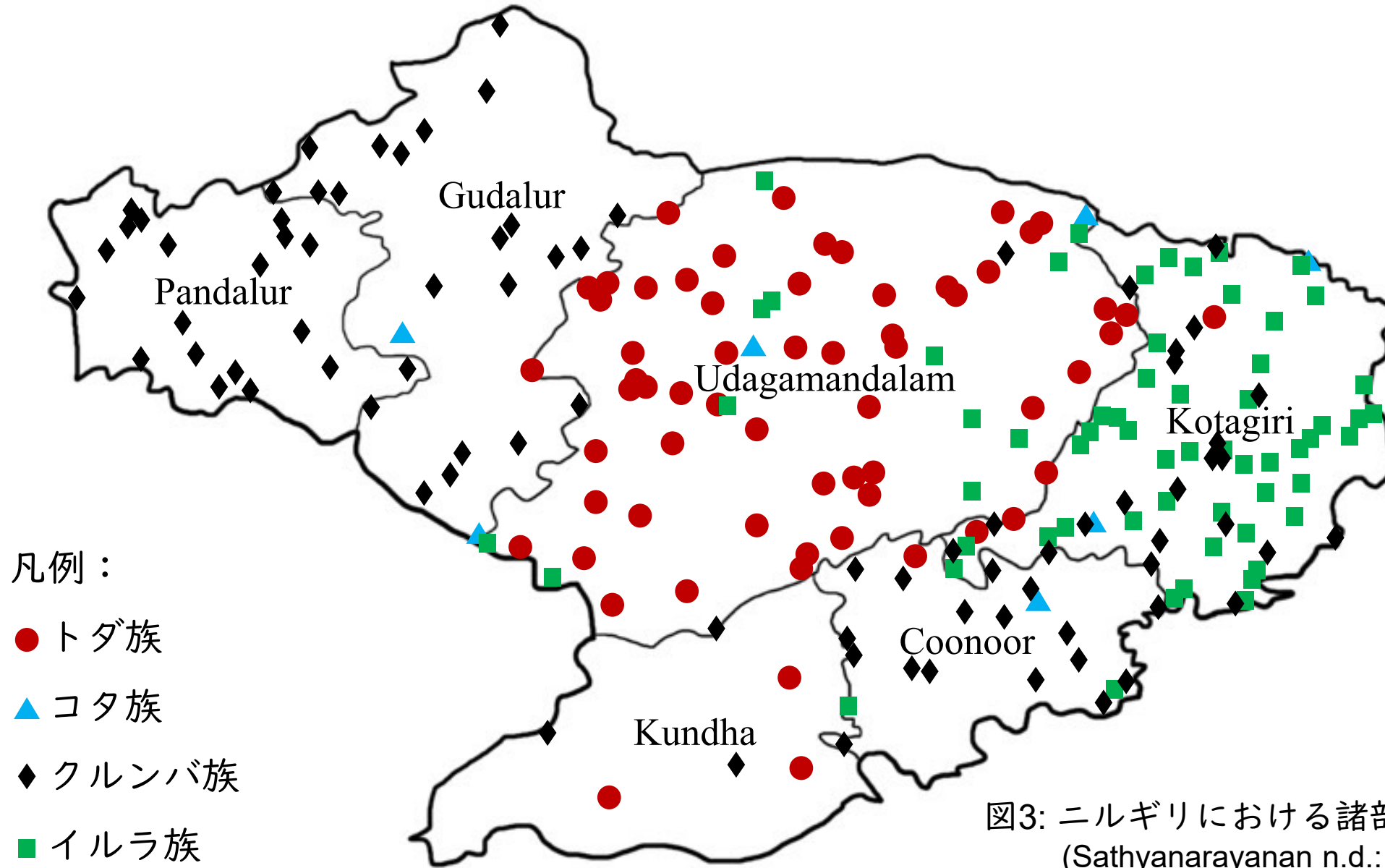


図3: ニルギリにおける諸部族の分布
(Sathyanarayanan n.d.: 2-9 をもとに発表者作成) 9

2. トダ族とトダ語

2.1. トダ族について

- ニルギリ丘陵に居住
- 半族 (moieties) と呼ばれる二つの集団から成る
- 2,002人 (Census 2011)

(Bhaskararao 2005: 728, Banerjee 2023b: 636–640)



(2024年9月撮影, 2026年3月現在は工事中)





2.2. トダ語について

- ドラヴィダ語族南部ドラヴィダ語派
- 母音と子音が [ドラヴィダ語族の言語で] 最多
- SOV語順
- 話者約900人，ほとんどがタミル語とのバイリンガル

(Krishnamurti 2003: 24–25, Bhaskararao 2005: 727–728)

2.2. トダ語について

主な先行研究

[文法書] Sakthivel (1977), Emeneau (1984)

[テキスト] Emeneau (1984), Nara & Bhaskararao (2002)

[辞書] Bhaskararao & Kobayashi (2025)

2.3. 調査 (トダ語)

◆ 調査方法：



- 小林 (2026) のタミル語／英語のデータを訳してもらう
- 英文を訳してもらう
- 発話を録音する
- 話者同士の会話を録音する

2.3. 調査 (トダ語)

◆ コンサルタント一覧：

生年	性	得られたデータ
A 1958	F	小林 (2026) から「受動表現, アスペクト」, ほか数文
B 1958	F	Dとの自然談話 (約6分: 昔の話)
C 1961	M	自然談話 (1分: お寺の説明)
D 1965	F	Bとの自然談話 (約6分: 昔の話)
E 1965~66	F	Aとの自然談話 (約15分, 約23分: 昔の話)
F 1984	F	小林 (2026) から「受動表現, アスペクト」
G 2003	F	小林 (2026) から「アスペクト」の一部

◆ いくつかデータの紹介：-*guš-* について

-  (1) *vijay ina:r* *vodguše:.*
vijay ine:r *pod-guš-Ø-i*
 PN yesterday come.S²-GUŠ-3-DECL
 ‘Vijay came yesterday’ (トダ語: コンサルタントA)
-  (2) *o:n mada:lko:ye: ay a:pil tīdgušpine:.*
o:n mada:lko:y=e: a·y a:pil tīd-guš-pin-i
 1SG already=EMPH that apple eat.S²-GUŠ-1SG-DECL
 ‘I already ate that apple’ (トダ語: コンサルタントA)

◆ いくつかデータの紹介：-*guš*- について

- Banerjee (2023b: 691)

- ・ Past Perfective (過去・完結)

- 今分析を終えたデータでは5例出現

- ・ うち3例はタミル語の「副動詞 + *vitu* 'leave'」に対応

→ 完結相 (~完了相) を表す

- ・ 2例は単純な過去形に対応

◆ いくつかデータの紹介：-*guš*- について

表1: -*guš*- がみられた例

番号	形式	自/他	人称	語研	小林 (2026)		
	- <i>guš</i> -	自	3	2-2	(15)	過去	完結
	- <i>guš</i> -	自	3	2-6	(19a)	過去	完結
(1)	- <i>guš</i> -	自	3	2-7	(20)	過去	PST
	- <i>guš</i> -	自	3	2-12	(29)	過去	PST
(2)	- <i>guš-pin</i> -	他	1	2-9	(22)	過去	完結

◆ いくつかデータの紹介：-*guš*- について

表2: 小林 (2026) において動詞が過去形だったものの (-*guš*- 以外)

番号	形式	自/他	人称	語研	小林 (2026)	
	- <i>vi</i> -	自	3	2-1	(14)	過去 完了
(3)	- <i>s</i> -	自	3	2-18	(40a)	過去 PST
(4)	- <i>s</i> -	他	3	2-20	(42)	過去 PST
	<i>wīdisi</i>	複	3	2-18	(40b)	過去 進行
	- <i>s</i> -	複	3	2-12	(31)	過去 完了
	<i>wīdo:si</i>	複	3	2-12	(27)	過去 完了
	- <i>š-pin</i> -	複	1	2-19	(41)	過去 PST
	- <i>pin</i> -	複	1	2-24	(46)	過去 将然

◆ いくつかデータの紹介：-*guš-* について

🔊 (3) 【長時間継続】

ine:r *ogo:r a* *ko:x* *warysi.*

ine:r *ofody a* *ko:x* *wary-s-i*

yesterday all that girl sleep.S²-3.PST-DECL

‘She slept all day yesterday’

(トダ語: コンサルタントA)

🔊 (4) 【多回のアスペクト】

am *mox* *ofodyo:ɬm* *kwirtsı.*

a·m *mox* *ofodyo:ɬm* *kwirt-s-i*

that man everyone give.to.3rd.person-3.PST-DECL

‘He gave (them) to everyone’

(トダ語: コンサルタントA)

- ◆ いくつかデータの紹介：-*guš*- について
 - 出現頻度・用例からみると、
現在では -*guš*- が単純過去を表す際に多く用いられる？
ただ、データが少ないのでまだまだわからない

3. コタ族とコタ語

3.1. コタ族について

- ニルギリ丘陵に居住
- 308人 (Census 2011)

(Banerjee 2023a: 411)



3.2. コタ語について

- ドラヴィダ語族南部ドラヴィダ語派
- SOV語順
- 862人 (Census 1961), Census 2011ではデータなし

(Banerjee 2023a: 414–415)

3.2. コタ語について

主な先行研究

[文法書] Subbiah (1985)

[テキスト] Emeneau (1944–1946)

[辞書] Wolf (n.d.)

3.3. 調査 (コタ語)




◆ 調査方法：

- 小林 (2026) のタミル語と英語のデータを訳してもらう

◆ コンサルタント：

	生年	性	得られたデータ
A	1967	M	小林 (2026) から「受動表現, アスペクト」, ほか数文
B	1977	F	小林 (2026) から「アスペクト」の一部

4. 比較：トダ語・コタ語・タミル語

-  (1) *vijay ine:r* *pod-guš-Ø-i*
 PN yesterday come.S²-GUŠ-3-DECL
 ‘Vijay came yesterday’ (トダ語:コンサルタントA)
-  (5) *vijay ne:r* *vad-Ø-ko.*
 PN yesterday come.S²-PST-3 (コタ語:コンサルタントA)
-  (7) *vijay neerru* *va-nt-aan*
 PN yesterday come-PST-3SG.M (小林 2026: 8)

今後の展望：

- ◆ トダ語に比重をおいて調査を進める
 - 今あるデータを整理
 - まずは動詞まわり，特にアスペクト
 - Emeneau (1984) のテキストにグロスをつける
(+コーパスとして使えるように整理する)

略号一覽

-	affix boundary
=	clitic boundary
	first person
3	third person
ACC	accusative
DECL	declarative
EMPH	emphasis
PN	proper noun
PST	past
M	masculine
S ²	second stem
SG	singular

参考文献

- Banerjee, Soumi (2023a)** Kota. In: Office of the Registrar General & Census Commissioner, India (ORGI). *Linguistic Survey of India-Tamil Nadu*, 411–457. India: Office of the Registrar General & Census Commissioner, India (ORGI).
- Banerjee, Soumi (2023b)** Toda. In: Office of the Registrar General & Census Commissioner, India (ORGI). *Linguistic Survey of India-Tamil Nadu*, 636–714. India: Office of the Registrar General & Census Commissioner, India (ORGI).
- Bhaskararao, Peri (2005)** Toda. In: Keith Brown (ed.) *Encyclopedia of Language & Linguistics*, Second Edition. Vol. 12, 727–730. Amsterdam: Elsevier.
- Bhaskararao, Peri and Masato Kobayashi (ed.) (2025)** *Toda Dictionary*. Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies.
- Emeneau, Murray B. (1944–1946)** *Kota Texts*, Volume 1–4. Berkeley/Los Angeles: University of California Press.
- Emeneau, Murray B. (1984)** *Toda Grammar and Texts*. Philadelphia: American Philosophical Society.
- 辛島昇 (2012)** 「ニールギリ山地諸部族」辛島昇・前田専学・往地利明・小西正捷・坂田貞二・重松伸司・清水学・成沢光・山崎元一 (監修) 『新版 南アジアを知る事典』 580–581. 東京: 平凡社.
- 小林颯 (2026)** 「タミル語：特集補遺データ「受動表現」「アスペクト」「モダリティ」「ヴォイスとその周辺」」 『語学研究所論集』 30 (24): 1–38.
- Krishnamurti, Bhadruraju (2003)** *The Dravidian languages*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Nara, Tsuyoshi and Peri Bhaskararao (eds.) (2002)** *Toda Texts*. Osaka: Endangered Languages of the Pacific Rim, Faculty of Informatics, Osaka Gakuin University.
- Sakthivel, S. (1977)** *A grammar of the Toda language*. Annamalainagar: Annamalai University.
- Subbiah, K. (1985)** *Grammar of Kota*. Annamalainagar : Annamalai University.

インターネット資料

Sathyanarayanan, C. R. (n.d.) Distribution of the Tribes in Nilgiris Maps https://www.academia.edu/32371749/Distribution_of_the_Tribes_in_Nilgiris_Maps. [最終閲覧日: 2024年6月30日].

Wolf, Richard K. (n.d.) *Kota Dictionary*. Manuscript. <https://www.richardkwolf.com/dictionaries/>. [最終閲覧日: 2026年4月28日].

d-maps.com. <https://www.d-maps.com/> [最終閲覧日: 2026年4月25日].

ご清聴ありがとうございました

